

ROUTE

140

Layback



帰国

旅に出るよ。そう言って海を渡ったあいつが12年ぶりに日本に帰ってくる。メジャー通算115勝。燦然たる結果を残した奴も遂に戦力外通告を受けたそうだ。ざまあみろ。そう言ってやろう。ベルが鳴る。子供の頃散々聞き慣れた声が響く。「おーい磯野、野球しようぜ」

台所から物音がするので恐る恐る見に行く。亀の子たわしがゴミ箱をよじ登っている。そうか。今日使い古したスポンジを捨てたからきっとその後を追って――。私はゴミ箱の中に落ちた亀の子たわしとスポンジを拾い上げる。元通りシンクの端に並べてやると、ふたりはきゅっと寄り添った。

虹

娘のあやは深い水溜りの上で自転車をこいでいた。後輪だけが水車のように水しぶきを飛ばしている。「あやちゃんやめなさい」「虹を作るんだもん」「あのね。虹は晴れてる時しかできないの」「できるもん」ふくれっ面。強情さは母親譲りだ。説得を試みる内、雲間から陽が射してきた。

最後の依頼

僕が死んだらHDDを破壊して欲しいんです。若者は淡々と語った。別段珍しい依頼ではない。部屋に入ると若者は穏やかな顔で横たわっていた。俺は金槌を振り上げ彼の頭を叩き潰した。火花が飛び散り微かに煙が上がる。誰にだって見られたくない記憶はある。俺は静かに手を合わせた。

ハート

好きな人ができたの。とつぜん彼女にそう言われ、ぼくの胸の中のハートは粉々に砕け散った。それ以来思い出の欠片はしこりとなってぼくの身体に残り続けている。もう半年も経つというのにまだ痛みは消えなかった。見かねた友人に勧められ、ぼくは病院に行ってみた。「尿路結石です」

感謝

「優秀なプログラマだったのよ。webは全て彼が見てくれていたし。でも夫としてはね。あの人、死ぬまで私に感謝の言葉も愛してるの一言もなかったんだから」「社長、これ見てみますか」「何?」「ソースコードの中に埋め込まれてますよ」//いつもありがとう。愛してるよ聡子。

我慢の限界

女という生き物はなぜ遅刻するのだろうか？ 支度に時間がかかるのならその分早起きすればいいだけの話なのに。腕時計を見る。約束の時間を既に1時間も過ぎていた。いつもこうだ。もう我慢の限界だった。「お待たせ」肩を叩かれた。「ごめんね」「なあ、俺たちもう、一緒に暮らそう」

観覧車

観覧車に閉じ込められたゾンビは急に大人しくなった。暴れる事もなくただ静かに座席に座り悲しみを湛えた目で小さな街を見下ろしていた。ぐるぐると夜通し回り続けたゾンビはやがて衰弱し本当の死を迎えた。安らかな死に顔だった。その後、世界中の街に観覧車が作られ始めた。

悲しい水

流した涙は蒸発して雨になるだろ。その雨が飲み水となってまた涙が流される。ぐるぐるぐるぐる回ってやがるんだよ。悲しい水がさ。だから俺がこうして酒を飲んで水を減らしてやってるんだ。酔っ払ったら？ みんなの分まで嫌な事を忘れてやるさ。そう言って死んだわ。馬鹿な人ね。

記憶喪失

気がつくと砂浜に倒れていた。寝返りを打つようにして体を起こす。目の前には穏やかな海が広がっている。ここはどこだ。いやそれ以前に、俺は誰だ？ 何も覚えていなかった。何かを思い出そうとすると酷く頭が痛む。昨日の味噌汁の具すら思い出せなかった。俺はいったい何人なんだ。

瘡蓋

「今日は特別に材料をご覧に入れましょう」シェフに連れられ厨房に入ると椅子に縛り付けられた女性がいた。身体中の皮膚が剥き尽くされ血と膿の混ざり合った粘液がぐじゅぐじゅと沁み出している。「さきほどお出しした瘡蓋はこの娘のものです」瘡蓋料理屋のシェフはにこやかに言う。

食事を終えた鴉は火葬場の煙突から漂う芳しい煙をゆったりと味わっていた。黒衣を纏った人々の話し声が鴉の耳に入る。「せっかく20カートンもまとめ買いしたのにねえ」「まさか次の日に死んでしまうなんて」「でも天国でたくさん吸えるわよね」一服を終えた鴉は飛び立った。

揺れ

定時間際のオフィスで携帯電話の音がけたたましく鳴り響いた。何が起こったのかとフロア中がざわめく。緊急地震速報だった。【〇〇県で地震発生。強い揺れに備えてください。(気象庁)] 早く避難しなきゃ。携帯の画面から顔を上げると、男性社員が皆、あたしの胸を注視していた。

お手伝い

「父さんは？」「畑よ」僕は駆け出そうとする。「待って、お父さんにお弁当届けてきて」父は太郎に鋤を引かせ畑を耕していた。「父さんお弁当」「おお、すまん」父は手を止める。「太郎にもあげていい？」「ああ」僕が与えた大根をトリケラトプスの太郎は美味しそうに食んでいる。

老婆

妙に長い杖を突いた老婆が車両に乗り込んできた。老婆はふらふらと優先座席の方へ近付いてゆく。ところが優先座席は既に先客で埋まっていた。老婆はすっと杖を構え若者の右目を突いた。飛び出した眼球は向かいの窓にワンクッションし、若者の上着のポケットにすっぽりと飛び込んだ。

爽やかな色

運動部の連中は秋季大会だなんだと騒いでいるけど美術部の僕らは今日も慌てず騒がず通常営業だ。「ね。先輩」「ああ」「先輩、ここ色どうすればいいですかね」「どこ」「この空ですけど」「群青色」「うーん。もっと爽やかな方が」先輩が頬を寄せてくる。「じゃ結城、男色はどうだ」

野菜が安かったので調子に乗ってかごに放り込んでいると大変な量になってしまった。両手が引きちぎれるかと思いながら帰ってきた。ふう。冷蔵庫に仕舞わなきゃ。ガチャガチャと玄関で音がする。待って。あたし。さっき。鍵。締めた？ 慌てて見にゆく、ゆっくりとノブが回る。ドアが開いた。

調査

住み慣れた土地を離れ新天地を訪れた私は目につく中で一番高い山に登り双眼鏡を取り出した。さあ調査開始だ。他の部族は見当たらない。クレーターは多いものの土地は肥沃、新陳代謝もまだまだ活発なようだ――「なあ」「何?」「どうも鼻がムズムズするんだ」「顔ダニじゃないの?」

クランクイン

「シナリオライター、スタイリスト、特殊メイク、役者、スタッフはすべて揃いました」「よろしい。広告案はできたのか?」「はい、キャッチフレーズはこれでいかがでしょう」【あなたの就活代行します】

お節介

『ほらあんた、ちゃんと食べなあかんやないの！ そんな食べっぷりやお乳もでえへんよ！』
『ところで旦那さんとはどうなの？ 仲良くやってるの？』「育児支援ロボットがなぜ大阪のおばちゃん風なんだ？」「孤立している若い母親にはこれくらいお節介キャラのほうがいいんですよ」

the day

娘のあやが洗濯機を回そうとしていた。「パパのも一緒に頼むよ」脱いだ靴下を渡そうとすると。「ごめん。パパのは別にして」きた。ついにこの日がきてしまった。私の胸はもう張り裂けんばかりだった。「どうしたの?」「あ。ママ実はね」「あらおめでたいわね。パパ、今夜はお赤飯よ」

新宿駅へ向かう途中。若い男の子に声をかけられた。近くのバーで働いているのだという。彼は料理の話をしている時のタモリのように熱のこもった口調で私を口説き、自分の店に連れていこうとする。「本当に今日はダメなの。ごめんなさい」「じゃ明日は来てくれるかな?」「……いいとも」

宇宙船

『本当に我々は自分の星に帰れるのか？ お前は我々の宇宙船を売り飛ばす気満々ではないか』 『商売なんだからしょうがねえだろ。絶対帰れるから安心しろ』 「おじちゃん風船ちょうだい」 「はいお嬢ちゃんありがと。100円ね」 銀色の宇宙船から垂らされた紐は少女の手に握られた。

寿司

元気にはしていますか？ ドイツの学校にもやっと慣れてきて僕はクラスの皆にsushiと呼ばれています。確かサッカー選手もそうだったよね。ドイツ人は日本人と見ると寿司を連想するようです。格好悪い渾名だけでしょうがないよね。あながち間違いでもないし(笑) ではまたね。靖

私を月へ連れてって

私を月へ連れてって。彼女が潤んだ目で言う。やせ細り骨と皮だけとなりはてた手を僕の頬にそっと伸ばす。月の上からこの星を見てみたいの。お願い。ああ。きっと連れていくよ。だから今日はもうおやすみ。指にキスをすると彼女は静かに瞼を閉じた。ありがとう。乾いた唇が震えた。

婚活女子

「編集長、婚活女子のインタビュー記事です」「どれ」『そうですね。私ももう三十代ですから、十代、二十代の頃とはやはり好みも変わってきていて、今ではソースよりヒレのほうが好きですね。京都の某店ではソースにすり胡麻を混ぜるんですけどー』「おい。これトンカツ女子だろ」

空き部屋に放置されたテレビの画面から黒髪がはらりと零れ落ちた。埃が舞う。長い爪がささくれた古畳を引っ掻き、細身の躰が吐き出されてくる。ただいま。おかえり、遅かったね。残業だったの。なにか食べる？ そうね、ありがとう。女は一人芝居を続ける。月だけがそれを見ている。

女子

「BLは好きですか?」「BLって、なんのことでしょう?」「分からないということは腐ってませんね。いたって健全な女子です」「そんな女子だなんて、先生、わたしもう41ですよ」「安心して下さい。この国では40代までは女子で通りますから」

HipHop

豚にHipHopを聴かせればいい肉ができるというので色々と聴かせてみたのだがウェッサイが好きな豚とイーサイが好きな豚とで分裂しdisり合ってしまう。そこでJ-HipHopを聴かせてみたところすぐに仲直り。仲間への感謝の心とリスペクトを忘れない良い豚に育ってくれた。

「至急、我が社に在籍している社員、及び過去に在籍していた元社員の喫煙行動の調査を頼む」「かしこまりました」「喫煙歴から一日に吸う本数まで事細かくだぞ」「は」「一本あたり五分で計算すると……」「ところでそのデータを何に使われるのですか」「給与の過払い返還訴訟だよ」

忘れ物

突然ドアが開いた。旅に出ると言って私の部屋を飛び出して行ったあいつだった。走ってきたのか息を切らせている。「なんなの?」「忘れ物を取りに来た」そう言って彼は土足のまま部屋に上がり私の手を取る。「ちょっとなんなのよ」「お前が必要なんだ。一緒に来てくれ、ATMまで」

プレゼン

同棲中の彼氏がパワーポイントを弄っている。仕事を持ち帰るだなんて感心感心。急に電気が消えた。「これを見てくれ」壁に映し出される資料。何かと思えば二人の馴れ初め。二人で撮った写真の数々。なんなんだ。最後に太文字。『結婚しよう』うわっめんどくせー。けど……「いいよ」

割腹

さっきから俺は自分の腹を繰り返して刺し続けている。腹を掻っ捌いては腸が零れる。零れた腸は巻き戻したように腹に戻り、傷が埋まる。再び刃先が腹に刺さる。ループする痛み。神は何をしている。『ごめんごめん。CDが飛んでたわ』意識が遠のく。今度こそ無事に演奏が終了しそうだ。

元彼女

SF好きの元彼女の部屋を一年ぶりに訪れた。「お料理を沢山作ったから食べながらお話ししよう。あなたはワインを出してきて」冷蔵庫を開けると中に赤ん坊が入っていた。「おい、これ」「ああ、その子はあなたの子よ。安心して、コールドスリープ中だから」彼女は朗らかに笑った。

約束

「いい湯だったよ」「そう。食事はいいのね」「ああ」私は冷蔵庫を開ける。「おい。ないじゃないか」「ごめんなさい。切らしちゃって」「あれほどプリンを切らすなど言っただろう」「本当にごめんなさい」「約束は覚えてるな」「はい。ラ・セーヌのクレームブリュレね」「2個だぞ」

鳥葬

葬式無用戒名不用。但し鳥葬にしてくれ。またややこしいことを。だがしょうがない。チベットまで親父の遺体を空輸し山の上まで運ぶ。ところが鳥達は全く寄り付かない。途方に暮れていると影が差した。プテラノドン！？ 翼竜は親父の亡骸をひと飲みになると瞬きもせずに飛び去った。

遺憾の意

帰宅途中、あいつの好きなケーキを買ってきた。昨日は喧嘩とはいえ酷い事を言ってしまった。今日は謝らないと。「ただいま」ドアを開けた途端鼻腔に芳しい香りが飛び込んでくる。「今夜はカレーだな?」「そうよ」「何カレーだい?」「野菜カレーよ。今はまだね」包丁がきらめいた。

安アパート

引っ越したばかりの部屋で缶ビールを開ける。ニュースが始まったのでTVのボリュームを上げた途端。壁ドンされた。さすが安アパート。壁が薄い。寝る前にシャワーを浴びていると今度は排水口から手が出てきた。「あのぉ、石けん貸してもらえませんか？」さすが安アパート。床も薄い。

美少女ロボット

博士はモテない。不細工であるからしょうがない。そう割り切ろうとしてもなかなか割り切れるものではない。くすぶり続けてきた想いが博士に美少女ロボットを造らせた。起動。博士はマミの額に手を当て人の心をインストールする。マミは瞼を開けた。「は、か、せ」「マミ」「えっち」

猫足バスタブ

フランスからアンティークのバスタブを取り寄せた。少女の素肌のようにきめ細やかな乳白色のボディを真鍮製の猫足が支えている。正に思い描いていた通りの品だった。明日には湯を張ろう。頬擦りをして床に就いた。朝方、浴室から妙な音がする。見にゆくとバスタブが爪を研いでいた。

空飛ぶ円盤

ある町に空飛ぶ円盤が現れた。それも町全体を覆い尽くすほどの大きさである。だが円盤は町を攻撃するでもなくただ静かに空に浮かび続けていた。当然日当たりが悪くなる。とにかく洗濯物が乾かないという事で乾燥機が売れに売れた。全世帯に乾燥機が普及すると円盤は隣町へ移動した。

変化

ずっと電話に出ない彼氏とメールで会う約束をしてやっと会えたと思ったら目を合わせようとしな。雑踏の中を歩くのに手を繋ごうともしない。人波に飲まれてゆく背中が知らない人のように思えて目がくらむ。気がつくとも地面にへたりこんでいた。大丈夫か？ 声だけは変わらないんだね。

一夫多妻

今年4月に一夫多妻制が導入されて以来、結婚の形式も様変わりしつつある中、22日、都内で1人の新郎に29人の新婦という前例のない挙式が行われた。新郎の丸福聡さん(28)は式の後、報道陣の取材に対して、30人31脚で幸せな家庭を築いていきますと朗らかな笑顔でこたえた。

ラジカセ

覚えたてのクイックターンのようにぎこちのない動き。サーというノイズの後、B面の1曲目が流れ始める。私は今、昔使っていたラジカセでビートルズのテープを聴いている。あの頃と比べ、音楽との距離は近づいたのだろうか。ダブルオートリバーズ。銀色のロゴが誇らしげに光っている。

受賞挨拶

私の小説の最初の読者は母でした。私が小さな手を鉛筆で真っ黒にしながら書き上げるおかしなお話を母はいつも面白いと言って褒めてくれました。それはけっして子供向けのおべっかではなくて、本好きな一人の大人としての真摯な感想だったと思います。妄想受賞挨拶。私に母はいない。

地球外生命体UZUはさらさらと夜風にざわめく麦穂によばれたから、月明かりを浴びて金色にかがやく大麦畑のベッドがただただ気持よさそうに見えたから、そこにごろりと寝転がっただけ。それがのちのちミステリーサークルなどと呼ばれることになろうとはゆめにもおもわなかったのです。

決議

午前4時。夜空の会議室。まいにちまいにち。くるくるくるくる。もう飽きたよね。飽きたよね。死のう。死のう。きれいに死のう。8000機の人工衛星がいっせいに身を投げた。夜明け前。寝付けぬ子が窓を開ければ流星群。途切れることなく。北の凍てついた大地に1匹のオオカミ。吠える。

小説

「小説の中では何が起こってもいいんだよ。もちろん何も起こらなくてもいいんだけどね」彼はそう言って笑った。「ただし。せめて1人には信じてもらわなければならない。それさえできれば立派な小説だ」「でももし0人だったら？」「おやおや君は自分の小説が信じられないのかい？」

リアクション

お風呂上がりにバスタオルも巻かずに脱衣所を出ると猫のラスカルが座り込んでいた。私の裸を目にした途端、怯えたように後ずさり、吐いた。おい。なぜ吐く。彼氏に電話で愚痴る。「動物から見ると毛皮に覆われてない生肌の人間は気持ち悪いらしいよ。僕は好きだけど。君の裸」ふん。

世界

少年の空は四角だった。高さ20mはあるであろう石塀に四方を囲まれた砂場。そして四角い空。それが少年の世界の全てであった。砂場の隅には小屋がある。雨はしのげる。風は吹かない。少年は風を知らない。少年は少年の世界以外を知らない。足元の扉が開く。白い手に冷たいスープ。いつもの食事。

お仕事

「ねえママどうしてパパ達は掘った穴をまた埋めてるの?」「もうこの国にはお仕事がないの。だから国がお金を配ってるんだけど、ただお金を配るだけだと文句を言う人がいるのね。かと言って作る道路も橋もないから仕方なく穴を掘って埋めるお仕事をしてるの。分かる?」「わかんない」

コンドーム

都内の薬局で針のようなもので穴の開けられたコンドームが数点見つかりました。製品パッケージには「あなあき きけん つこたら できるで」と書かれた紙が貼られおり警視庁はサガミ・オカモト事件として捜査本部を立ち上げましたが少子化対策になるという事ですぐに解散しました。

父親の事を憎んでいた娘が眠りこけている母親の乳首にトリカブトの毒を塗った。いつものように酔っ払って帰宅した父親は妻の体を求める。父親はまず妻の乳首を舐めた。そしてその後キスをした。これで二人が亡くなった理由は分かる。だが、なぜ検死をした監察医の江頭先生まで……

絶滅

「メシを食わせてくれ」「あんた金はあるのかい?」「金はない」「じゃあきらめな。外でミミズでも食ってるんだな」「これでなんとかならないか」男はズタ袋から金色の粘液が入った硝子瓶を取り出した。「これはなんだね」「蜂蜜だ」「馬鹿な。蜜蜂は200年以上前に絶滅した筈だ」

養蜂家

「あんたなんで蜂蜜なんてものを持ってるんだ」「俺は養蜂家の末裔だ。バッグの中には蜜蜂の幼虫が入ってる。コールドスリープの状態だな。花が咲く土地を探して旅してる訳さ」「じゃ町外れにある赤い屋根の家に行ってみな」「なにがあるんだ」「そこの爺様が花咲か爺さんの末裔なんだよ」

大阪

出張先の大阪で小さなお好み焼き屋に入った。自分で焼く店だ。生地をコテで押さえていると押さえたらあかと怒られる。焼き上がった豚玉はふわふわで美味かった。「ご馳走様でした」「おおきに」引き戸を開けると外は雨。傘はない。「雨やなあ。お兄さんこれ持って行き」ぽんと傘を渡された。

パトロール中のクマが山に入ってきた人間の親子を殴殺したところ、それを耳にした山の小鳥やリスたちからかわいそうだという声が上がった。しかしこれは山の動物の安全を守るためにはいたしかたないことだとクマのパトロール隊長は本誌の取材に対して語っている。(ムササビニュース)

「あなたが落としたのはこのリア充ですか」「違います」「ではあなたが落としたのはこのネット充ですか」「違います」「それではあなたが落としたのはこのあだち充ですか」「違います」「正直者のあなたにはこのやくみつるを差し上げましょう」「要りません」

眼鏡君

電気消してねって言ったのに。消したらなんも見えないじゃん。眼鏡外すし点けてていいよね。とか男の子ってほんとばかだなと思う。彼の湿った唇や指先に集中していると急にひやり。片目をあける。眼鏡かけてる。こやつ。いつの間に。あたしは両の手を伸ばし彼のレンズに指紋をつける。

記憶

ふっといい香りがした。目の前の雑踏は風に消え去り記憶の底から掬い上げられたあの人の顔が唐突に浮かぶ。すっかり忘れていたのに。笑いそうになる。匂いの記憶ってすごい。同じ香水を嗅いだだけで昔の恋人を思い出すだなんて。小説の中だけの話だと思ってた。肩を叩かれる。「悠子、だよな？」

秘密

あのころ僕はいい加減な大学生でいい加減にでも結構まじめにバイトや遊びに明け暮れていてその日も営業終了後のバイト先の飲み屋のホールでくだらないことを喋っていたんだけども目の前には好きだった女の先輩がいてそしたら急に店の電気が消えて僕の唇は彼女に奪われることとなる。

Kill

車を道路脇に停める。エンジンを切ると冷たい沈黙が車内を満たす。「次いつ会えるん」彼女が口を開いた。「もう会わへんほうがいいと思う」「なんでそんなこと言うん」「ずるずる続けてもしょうがないやろ」彼女が顔を背ける。「電話は」「あかん」「メールは」「あかん」震える声に挫けそうになる。

背中を突き飛ばされる。抵抗はしない。どうせ自分の席に座っていても一人きりなんだから掃除用具入れに閉じ込められたところで何も変わりはない。空想に浸っていればいいだけだ。ただ埃臭いのは参ってしまう。ここに入るまで埃に匂いがあるなんて気付かなかった。やっぱり私も臭いのかな。

労働力

廃棄食材を再利用したゾンビフードが開発されて以来ゾンビが人を襲う事も無くなった。今では工場等での単純作業の多くがゾンビの仕事となりつつある。勿論腐り落ちる肉片や体液を防ぐため長手袋や帽子の着用こそ必要ではあるが、人口減少が進む中、彼らは新たな労働力として期待されている。

補充

ゾンビの店員が黙々と弁当棚の補充をしている。青白ストライプの制服が全身を覆うタイプなのですぐに分かる。横顔を見ると眼球が零れ落ちそうになっている。近頃ではコンビニで人間の店員の姿を見ることは殆どない。俺は店員の邪魔にならぬように秋鮭弁当を手に取りレジへ向かった。

眠り

現実の世界よりも眠りの世界のほうが魅力的に思えてきて起きたくない起きたくないそう思い続けているうちにいつしか僕は長い眠りに就いていた。どこからか母の音がする。「この子も喜ぶと思います」胸がちくり。それが激痛に変わる。身体の中から何かがもぎ取られる。母さん僕はまだ

中身

「いつまで化粧してるんだよ」「だって」「少々目が小さかろうが貧乳であろうが問題ないよ」「貧乳は余計」「なににせよ僕は君の中身に惚れたんだから」「でも」昔飲んだ透視薬が今だに効き続けている事は彼女に話していない。「お待たせ。行きましょ」惚れ惚れするほど綺麗な骨だ。

雨ふり

「雨やまないねえ」「やまないね」「お外いけないねえ」「いけないね」「でも傘さしたらいけるよ」「いやだ」「ものぐさだねえ」「きみもね」「ねえ」「はい」「ねえ」「なに」「ひま」「じゃコーヒーいれてきて」「いやだ」「じゃだまってて」「なにそれかんじわるい」雨の日曜日。

「それにしても見事な骨格標本のコレクションですね」「ええ。実はすべてわたしが作ったものでして」「ご自分で?」「なに簡単な仕事です。動物の死骸は地中に二年も埋めておけば綺麗に骨だけになりますから」「ほう。ところでいま奥様は」「庭ですよ」老人は窓の外を指さした。

おめめパッチリ

「ねえママはやくおかいものいこうよ」「ちょっと待ってね。いまママお化粧してるから」「ママおけしょうしなくてもかわいいよ」……。上手ね。どこで覚えてきたのかしら。「もう少しだけおめめパッチリにするからね」ぽんぽんと肩を叩かれる。「はいこれ」遠視用眼鏡を渡された。

うつ

うつ病を患って働けない私の代わりに妻が働きに出ている。家事もろくに出来ない私は役立つの生ごみとしてただ家にいるだけである。妻はそんな私にあなたはただいてくれるだけでいいのよ。そう言ってくれる。ただ働いてくれるだけでいいのよと言われていたあの頃とは大違いだ。

好き

「礼子、遭難中はひもじかったらう。回復したら何でも食わせてやるからな」礼子は何かを言おうとする。声にはならないがひび割れた唇の動きで分かる。『好き』「バカ野郎。こんな時に何言ってんだ」『好き』礼子は何度も繰り返す。口づけで黙らせようとするとう微かに声が聞こえた。「寿司」

握手

我が家にホームステイ中の火星人をBKA84の握手会に連れて行ったところ突然涙を流し始めた。「何と残酷な。あのような年端も行かぬ少女達が何故」「どうしました？ ただの握手会ですよ」「握手？ あれは性行為ではないのですか？」そういえば。彼は私の前で決して手袋を外さなかった。

目を覚ますと夫が薄明かりの中で何かを読んでいた。「まだ起きていたの?」「ああごめんよ。起こしてしまったね」夫は一枚の紙切れをサイドテーブルの上にそっと置いた。「何を読んでいたの?」夫はわたしに体重をかけないようにやさしく覆い被さってくる。首筋に冷たい手が触れる。「遺書だよ」

初心者

恥ずかしながらパソコンというものを使うのは生まれて初めてだ。妻に文字通り手取り足取り教わりながら基本的な操作をなんとか覚えることができた。「あら凄い。ちゃんと文字入力できてるじゃない」「ああ。でももう目が疲れたよ。文字が歪んで見えるんだ」「あなた。それは認証画面よ」

事故物件

夫が唸り声を上げた。「この記事を読んでたら心配になってきたよ」「なにが?」「いわゆる事故物件ってやつさ。天井裏とか押入れの仕切りの裏にお札が貼ってあるんだと。この部屋も古かったもんな」夫は止める間もなく押入れの中を覗き始めた。「おい、このお札って……」「バカ。私のヘソクリよ」

京都市上空に空飛ぶ円盤が大編隊で現れた。黒い円盤。白い円盤。黒い円盤。白い円盤。交互に舞い降りてきては交差点に着陸する。街を破壊する事こそ無かったものの時を追うごとに円盤の数は増えてゆくばかり。一向に帰ろうとせぬ円盤に痺れを切らせた京都の人々は遂にぶぶ漬けを用意し始めた。

未来の子

チョークの粉も消しゴムのかすも見当たらない清潔感溢れる教室で生徒たちは皆退屈そうに教科書アプリを弄っている。いや、一人だけ。貴重な藁半紙を丹念に折っている生徒がいた。邪魔する者は誰もいない。五分後。彼の飛ばした紙飛行機はホログラム教師の背中をすうっとすり抜けた。

三本のポッキー

いいかお前たち。今ここに三本のポッキーがある。これをまず三本共まとめて父さんがくわえる。そして扇状に広げたポッキーの先をお前たち三人がそれぞれくわえるんだ。そうだ。いいぞ。この形をよく覚えておけ。これこそがキャバクラで三人のお姉さんと同時にキスをする方法だ。

ベッドにもたれてギターを弾いていると隣で漫画を読んでいた姉の友達がぼつりと呟いた。「きみの指でね、弦がこすれて、きゅって鳴るのが好き」開いたページから目も離さずに。「あ、うん」僕は二つ年上の彼女が口にした「好き」という言葉の響きに過剰に反応して口ごもってしまう。

留守

「旦那様は？ 最近見かけないけど」「長期出張中なの。だからこうしてわたしも羽を伸ばせるってわけ」「亭主元気で留守がいいっていうものね」「それよりも、さあ冷めないうちに食べてみて」「見事な霜降り肉ねえ」「それはそうよ。だって毎日ビールを飲ませてたんだから」

ダストボックス

夜半過ぎ。ゴミを出すため下に降りるとダストボックスの蓋が開いていた。誰だ。カラスに荒らされるじゃないか。近付いてゆくとガサリと音がする。猫かと思ったらボックスの中から人が這い出てきた。防犯灯に青白い顔が浮かび上がる。「あら。今日はまだだったのね」昔別れた彼女だった。

夜の活字

活字だって時には身体を動かしたくもなるさ。真夜中にサッと電気を点けて本を開いてごらん。活字たちが慌てふためいて元の位置に戻るところを見られるかもしれないよ。

雪星

星境の長いトンネルを抜けると雪星だった。目の前が文字通り真っ白になった。星間トンネルから吐き出された僕は雪の平原に頭から突っ込んだ。衝撃に目がくらむ。息ができない。必死に手足を動かしてやっと抜け出した。ぶはっ。雪を吐く。肺に冷気が流れ込む。ふう。新雪で良かった。

前世

「占い師のどこ行ってきたのか」「うん」「どうだったんだよ」「うん」「うんじゃわかんねーよ」「私はいいの。ただトシくんの前世はザリガニだって」「は？ ザリガニ？」「写真で占ってもらったの」「例の写真だろ。お前が部屋に飾ってた」「うん」「俺がダブルピースしてるやつ」

ロティ

もう会えないんだという俺の呟きに「どうして？」と吹き出しがポップアップする。ブログペットのロティは不思議そうに首を傾げる。ごめんな。人間は勝手だよな。マウスポインタで頭を撫でてやるとロティはすぐに眠りについた。俺はブラウザを閉じる。それ以来ブログは開いていない。

ゲーム

「神様。どうもゲームバランスが悪くなってきたようです。人間がちっとも繁殖しません」「よし。もう少しセックスの快感度を上げてみるか」

魔王と勇者

「魔王よ。ここにお前の卒業文集を持ってきた。『将来の夢』僕はパン屋さんになりたい。なぜなら美味しいパンで皆を幸せにしたいからです。なのに今のお前はどうか!」「勇者よ。私もそなたの卒業文集を手に入れたぞ。『将来の夢』僕の夢は世界征服です。これはどういうことかな?」

セックスレス

妻とはセックスレスだった。今年に入ってから何度しただろう？ 記憶にあるのは先々月の1回だけ。室内犬のことは猫可愛がりするくせに私のキスには顔を背けるのだから腹立たしい。そんなある日。妻が妊娠したようだということで共に産婦人科を訪れた。医者に見せられたエコーには犬の影が写っていた。

骨壺

「骨壺。異様でしたね」「あれは骨壺というより骨缶だな。よっぽど故人のことを恨んでいたのか。それとも作家に相応しい容れ物を用意したということか」「でも僕ならごめんですね。死んでまで缶詰にされるなんて」

餌

「活字にも餌が必要なんだ。僕がページに餌を落とすと彼らはわらわらと寄ってくるよ。実に可愛いもんだ。ただ昨日は腹が一杯だったのかもしれないね。だからきっと君の言うそれは彼らの食べ残しだと思うな」「とにかくポテトチップを食べながらわたしの本を読むのはやめてちょうだい」

紅葉狩り

娘を連れて紅葉を観に来ていた。「お父さん綺麗やねえ。万華鏡みたいやねえ」娘の発した言葉にぎょっとする。いつもはパパと呼ぶのに。それに万華鏡はまだ見た事もない筈だ。娘はきょとんとしている。「ねえぱぱ、ままにもみせてあげたかったね」私は娘の手を握る。「ママもきつとお空から見てるよ」

ばか

赤ん坊は気になるものには近づいてって手をふれて無意識に口に入れるだろう？　それが人間の本能ってもんだし、格好つけずに皆そうやって素直になったらいいと思うし、だから、つまり、おれが今お前にキスしたのはお前のことが好きだからに決まってるだろうが最後まで言わせんなばか

泥棒

昼間の喧騒が嘘のように町は静まり返っている。冷たい月に照らされた目抜き通りにひとけはまるでなくただ道端に1匹の黒猫だけがしなやかな影を伸ばしていた。泥棒のポンテは黒猫にぼやく。「どの家に忍び込んでも目ぼしいものは見つからなかったよ」また勇者に先を越されたようだ。

谷間

Fカップの女の子の胸の谷間に住んでるって言うとき。よくうらやましいうらやましいとか言われるんだけどじっさいそんないもんじゃないよ。夏場はすぐに汗でじっとりとしてくるし冬は冬で乾燥してかさついた乳布団を被って寝るんだから。想像してごらん。じっさいそんないもんじゃないよ。

二人の隙間

沈黙が重い。だだっ広い公園に並べ置かれたベンチに腰掛けているのは僕たちだけだった。いつものまにか大きく開いていた二人の隙間にけやきの黄色い葉がはらりと落ちてくる。もう別れよう。どれだけ長い時間舌の上で転がしても決して丸くはならなかった言葉を僕はむりやり吐き出した。

タッチ

本を取ろうとした俺の手が同じ本を取ろうとした女の子の手に触れる。あ。すみません。どうぞ。どうぞ。どうぞどうぞ。どうぞどうぞ。譲り合っていると座って本を読んでいたメガネ女に舌打ちをされる。俺と彼女は顔を見合わせて吹き出した。この作家好きなんだ？ うん。先に読む？

分厚い本大賞

「発表します。2050年度の分厚い本大賞は――」ドラムロールが鳴り響く。もったいつけた表情の後、司会者が紙片を読み上げた。「カラオケの歌本」歓声ともブーイングともつかぬ声が客席から上がる。「なんと30年連続受賞です」舞台袖からプレゼンターの京極夏彦が現れた。

小学生だった僕に葉は言った。「あなたの読みかけの本が私の寢床になります。だから毎日本を読んでください。さもないと私は寢床を失い地球を去らねばなりません」僕はその日以来一日も欠かさず本を読み続けている。そして今日も。僕は読みかけのページを開く。iPhoneの中で葉が目覚ました。

彼はいつものように本を読みながら私を求めてくる。片手で丁寧に愛撫しつつももう一方の手でページをめくることをやめようとはしない。最初はよくもそんな器用なことができるものだと思ったのだが彼にとってはそれが自然なんだそうだ。付き合い始めてはや25年。今も変わらず彼は童貞である。

「それでは求職カードを拝見いたしますね。前職は勇者とありますが、先月末で一身上の都合により退職と。新卒で勇者の仕事に就かれてからは一度も転職はされていないのですね」「ええ、仲間の魔法使いや戦士は何度か転職をしましたが私はそれこそ勇者が天職だと思っておりましたので」

フリック入力

スマートフォンは確かに便利だ。技術革新は素晴らしい。だがそのおかげで物理ボタン式の入力インターフェイスはすっかり廃れてしまった。今や大画面テレビでもタッチパネルなのだ。「父さん、そんな入力じゃ遅いよ。ほらもっと手首を使ってフリックフリック、ボクシングのフリッカージャブみたいに」

千羽鶴

娘は小さな手で鶴を折り続けていた。もうママは帰ってこないんだよ。そう言っても娘は鶴を折ることを止めようとはしない。数日後。妻の遺影の横には立派な千羽鶴が掛かっていた。疲れ果てた娘はソファで寝てしまっている。コツリ。窓が鳴った。コツリ。私はカーテンを薄く開けた――

視線

ものごころついて以来。いつも誰かから見られてるような気がしていた。だが振り返ってみても誰もいない。ストーカーだったらやだなと思って兄に相談してみてもお前はほんと自意識過剰だよなと笑われただけだった。まただ。視線を感じる。「三次元はいいな」空のどこからか声がした。

道頓堀

地下鉄御堂筋線をなんば駅で降り14番出口から地上へ出る。戎橋の方へ向かって歩いていると唐突に悲鳴が上がった。巨大なカニがハサミで通行人を捕まえ口へと運んでいる。気の毒に。恐らく観光客だろう。地元の間人にとっては見慣れた光景であるので特に足を止める者もいなかった。

ベビーフェイス

ベビーフェイスは鉄アレイで女の顔を潰してゆく。いくら死体とはいえ見ていて気分の良いものではない。童顔男は無残に成り果てた女の頭を蹴り飛ばすとジーンズをずり下ろし始めた。「最近顔は潰してから姦るのがお好みらしい。変態度が増してやがる」「男の時は」「聞きたいか？」

茸

体中から茸が生えてくる奇病に悩まされていた。いくつ病院を回っても原因は分からなかったし、どの薬を試してみても効果はまるで見られなかった。悩んだ末、外科手術に頼ることにした。12時間に及ぶオペは無事成功したように見えた。だが麻酔から覚めると僕は女の子になっていた。

大男

ドドドドと地響きがする。遅刻や遅刻やーという甲高い叫び。信号待ちの群衆が割れる。心齋橋筋商店街を大男が駆け抜けてくる。戎橋中央で踏み切った大男は夜空に身を翻し、背中からビルの壁面に吸い込まれた。瞬時にネオンが点灯する。道頓堀の夜の幕開けにどっと歓声が上がった。

辛さ

彼女はとにかく刺激物がダメだった。寿司を食べに行けばサビ抜きだし、韓国料理やタイ料理など香辛料を使う料理はもっての外だった。必然的に外食の選択肢は狭まる。それが俺には辛かった。だがある時気付いた。辛いものは家で食べればいいんだ。てな訳で俺は今、2つの鍋でカレーを作っている。

枕投げ

それは修学旅行の夜、枕投げをしている時に起こった。「おまえらええ加減にせえ！」私たちは尖った声に動きを止めた。先生が来た。そう思ったのだ。ところが部屋のドアは閉まったまままだ。私たちは顔を見合わせた。「阿呆。ここやここ」私の抱えていた枕の中から小さなおっさんが出てきた。

枕投げ2

「これやから修学旅行シーズンはかなわんねや。近頃ではやっと枕投げブームも下火になったかとおもてたのになんや。まあええ。今日は多目に見たる。久々に女子高生の髪の毛の匂いも嗅げることやしな。ほれ。ええ子やからはよ寝え」「おっちゃん、誰？」「枕の精や」私たちは枕をせずに寝た。

貧乏揺すり

父はずっと家に居て常に貧乏揺すりをしていた。目障りだからやめてよ。何度言っても父は貧乏揺すりをやめようとはしなかった。私が13歳の冬。父は突然病に伏せた。それでもけして病院には行こうとせず布団の中で貧乏揺すりを続けていた。翌春。父が事切れると家中の電気が消えた。

釣果

いい加減この糞みたいな人生を終わらせてやろう。どうせなら保険金が確実におりるのであろう事故死が好ましい。俺は海釣りの格好を揃えて夜の防波堤を訪れた。波に飲まれたふりをしてダイブする前に少しだけ夜釣りを楽しむか。そう考えたのが間違いだった。爆釣。楽しい釣り超楽しい。

リーク

ただいま。華奢な背中に声をかけても返事はなかった。夕食の用意も何もない食卓の上で妻は掌を広げている。「話があるの」「なんだい?」「あなた浮気してるでしょ」「バカな。してるわけないだろう」「見てみたら」妻はリビングのパソコンに視線を送る。画面には「Wikileaks」の文字。

居場所

定年退職して以来家に居場所がない。朝、テレビをみても新聞をめくってもうるさいと言われる。朝食の支度など始めようものなら言わずもがなだ。もう少し寝ていると言うが目が覚めてしまうものは仕方ないではないか。私は愛犬を散歩に連れながら考える。来年は犬小屋を増築しよう。

毛の話

デパートで買い物中、鏡を見るたび最近髪が薄くなったとぼやく夫にそんなに嫌なら増毛でもすればいいのにと笑いながら言うと、急に真顔になった彼はノースリーブ姿の私の腋のあたりを一瞥してつぶやいた。「完璧な増毛などといったものは存在しない。完璧な脱毛が存在しないようにね。」

雪だるま

自在に天候を操れることに気付いたその日から僕は薄汚い世界を綺麗にするために毎日雪を降らせている。すぐに地球は真っ白な球体に生まれ変わった。今では急ピッチで月にも雪を降らせている。互いに惹かれ合う地球と月はもうキス寸前。僕は宇宙にぷかぷかと浮かびながらそれを眺めている。

変化

30年という長い眠りから目覚めてみると世界はほとんど変化していなかった。ただ一つのことを除いては。男性がみな女性の背に二人羽織の体で張り付いているのだ。不思議に思った私は道行く女性にその理由を尋ねてみた。「いまや男性は女性のブラジャーとして乳を支える役割しか果たしていません」

変化2

「いまや男性は女性のブラジャーとして乳を支える役割しか果たしていません」「なんということだ。ではパートナーが貧乳の場合はいったいどうするのですか」私がそう訊くと女性は苛立たしげに言った。「揉むのです」去り際、彼女の後ろで振り返った男性は悲しげな微笑みを私に見せた。

年賀状

またか。5枚連続で子供の写真を使用した年賀状が続いたところでうんざりして葉書の束を放り出した。お前たちはなぜ子供の写真を年賀状に使う。結婚出来ない者もいれば子供を産めない者もいるということになぜ思いが及ばない。まったく神経を疑う。俺の年賀状は今年も愛車の写真だ。

散らかす

「食べ散らかす。これはよくない」私はおしぼりでテーブルをサッと拭う。「脱ぎ散らかす。これもよくない」言いながら私はおしぼりを丁寧に丸める。「しかしだ。ハゲ散らかす。これはなんだ？ ハゲはいい。事実だからな。だが散らかすとはどういう事だ！」私は丸めたおしぼりをテーブルに叩きつけた。

ツイッターのTLを読んでいると妻が後ろからディスプレイを覗き込んできた。「今年もサンタさん仕様のアイコンが増えてきたわね」「ああ」「そういえばこのあいだ奈良に行った時、せんとくんもクリスマス仕様になってたわよ」「サンタの格好を?」「いいえ。角がトナカイだったわ」

イブの夜

イブの夜に男二人でサイゼリア。我ながら情けない。若かりし日の思い出と乾いた生ハムを安ワインで流し込み通りかかったウェイトレスをつかまえる。「バイト何時まで?」「十時よ」「ねえパパケーキは?」隣で息子をごねる。「ああ。ママのバイトが終わったら一緒に買って帰ろうな」

いつも一言多い彼の顔にグラスの水をかけた途端、目から火花が飛び散った。「胃の内容物がまだ消化されていませんね。これはアンティパストですか」「ええ。食事を始めてすぐでしたので」「以前にも申し上げましたがこの彼氏ロイドは防水仕様ではありません。今回も水没扱いで保証対象外となります」

不審者

昨夜、都内の公衆浴場で、赤い服を着た初老の外国人男性が覗きの現行犯で逮捕されました。男性は警察の調べに対して「そこにしか煙突がなかった。どの煙突でも良かった」などと供述しており、警察では不法入国の疑いもあるとみて更に調べを進めています。

カラーボール

一人旅の途中、広場で野球をしている子供たちが目に入った。混ぜてくれよ。負けている方のチームに入れてもらおう。なかなかいい球を放る。ピンク色の軟式球だった。なんで色がついてるの。そう尋ねると。もうすぐ雪が降るやろ。ボールを失くさんように色をつけとるんや。少年はぶっきらぼうに言った。

おじいちゃん

家族で海老蔵の記者会見を見ていると最近ボケのはじまったおじいちゃんがぼつりと呟いた。「海老蔵も反省してるようだし許してやればええんじゃないか」今日は頭もはっきりしてるんだなと思って僕は少し嬉しかった。「ほれ、しっかり頭も丸めてきとるじゃないか」やっぱりボケてた。

小さな象

近所のお姉さんが小さな象を散歩させていた。「こんにちは」「あら、こんにちは」「かわいい象さんですね」「でしょ」そう言ってお姉さんは身の丈50cmほどの小象の背をやさしく撫でた。小象は嬉しそうに鼻を伸ばす。「このお鼻がとってもいいのよ」何にいいのかは訊けなかった。

クリスマスプレゼント

時々配達先の靴下の中にお菓子が入っていることがある。サンタさん食べて下さいということなのだろう。実は就業規則では禁止されているのだが、私はありがたくいただくことにしている。今年も子供たちの優しさに励まされながら最後の家に赴くと、靴下の中には干し草の束が入っていた。

今日だけでもう何人目だろう。12月に入ってから買取目的でない男性客の来店が急に増えていた。「アクセサリーはこれだけですか」「申し訳ありません。今月は特に品薄です。25日以降には商品も増えるはずなんですが」「それだと間に合わないや」男性は悲しそうに笑ってみせた。

あやしいサンタ

ぴよこぴよこと階段を降りてくる足音。娘のあやが顔を出した。「ぱぱおはよ」「おはよう。サンタさんは来てくれたかな」昨晚はずっと欲しがっていたDSを靴下に入れておいたのだが。「あのね赤い服の変なおじさんが窓から入ってきてね。パソコンを広げて壁に何かを映しだしたの」「プ、プレゼン？」

影待ち人

ときおりぱちぱちと焚き木が爆ぜ、火の粉が波間に舞う。素足に触れる砂浜は下ろしたてのシーツのようにひんやりとしていて心地良かった。海に向け膝を抱えた俺は、目の前に広がる暗闇を見据え、産卵の為この時季この島にだけ姿を現すというアーケロンの影を、ただじっと待ち続けていた。

改札前

改札の近くで女の子は泣き出しそうな顔をしていた。その正面で男の子は所在なさに立っていた。別れ話だな。すぐに思った。自分たちもあんな風に見えていたのだろうか。神様。今夜大切な人を失うのは一人だけでいいよ。人のまばらなホームで僕は、携帯のメモリーをひとつ、消した。

アンドロイドフォン

新型アンドロイドフォンは彼の声だけでなく、体温や息遣い、心拍まで伝えてくれる。常に彼の端末と同期し続けていてくれるのだ。今夜も私は愛する人の温もりを頬に感じながら眠りにつく。忘年会に参加している彼がどうか飲み過ぎませんように。朝目が覚めると、ほんのりゲロの香りがした。

断罪

「あなた浮気してるの？」緊縛されたままの私は必死に首を横に振る。「そう？」妻の細い指が私の舌を摘む。開口具のせいで抵抗できない。「見たの」妻の右手にはいつの間にか裁断鋏が握られている。舌先に冷たい感触。「見たのよ」視界が滲む。「嘘つき」妻のこぶしが握り込まれた。

発掘

昨夜の吹雪が嘘のように空は晴れ渡っていた。有難い。発掘作業が捗る。既にマンモスやペンギンの採集には成功した。だがまだヒトは見つかっていない。暫く掘ると氷壁の中にヒト型の影が見えた。更に氷を掘り進めてゆく。糞。人形だった。肩口には南極1号と書かれていた。

極厚

コンビニのコンドームの棚に極厚と書かれている商品があった。手に取ってみると「いつも女性に早すぎると言われる方におすすめです」などと書かれている。俺のことじゃないか。そっとレジを見る。可愛い女の子の店員だった。俺は極厚と極薄を取り替えてレジへ向かった。

青い光

夜の水族館を訪れる。大水槽を半円でくり抜いたトンネルの中はふたりきり。青い光がシャワーのように降り注いでくる。彼女の横顔もすっかり青に染まっていて僕はくすりと笑う。僕の視線に気付いた彼女も同じことを思ったのかくすりと笑う。きゅんときた僕は彼女を抱き寄せる。

好きの意味

わたしのこと好き？ と訊かれて、まず好きという言葉の意味をはっきりと定義してもらわないことには質問に答えることはできないな。君のその好きはLikeなのかい？ それとも、と言いかけたところで頬が鳴った。極めて遺憾だよ。僕は彼女の武力行使に対して遺憾の意を表明した。

流星群

夜空を駆ける流星群。彼らは人の願いごとを聞かされるばかり。私は流れ星の言葉も聞いてあげようと思い耳を澄ませる。『もっと生きたかった』突然、光の軌跡が弧を描いた。光球は草原に着弾し白い炎が上がる。次々と流れ星が落ちてくる。やがて炎は連なり文字が現れた。『ありがとう』